

---

研究報告

---

「白バラ」展におけるアンケート報告

加藤 陽子<sup>a</sup> 村上 公子<sup>b</sup>

A Questionnaire Report in the “White Rose” Exhibition

Akiko Kato<sup>a</sup> and Kimiko Murakami<sup>b</sup>

(<sup>a</sup> Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University,

<sup>b</sup> Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : October 16, 2008 ; Accepted : March 11, 2009)

Abstract

“White Rose: Students who Resisted Hitler”, part of the “Crisis and Humanity” project (2004-2007) at the Advanced Research Center for Human Sciences, is a panel exhibition about student movements against Nazism in Germany during World War II (1933-1945).

The exhibition has traveled 16 locations throughout Japan. The present paper reports the results of a questionnaire survey that asked visitors to give their opinions of the exhibition.

Visitors of all ages and both genders visited the “White Rose” exhibition. The survey revealed that most visitors who were unaware of the activities of the “White Rose” had a negative image of the movement, associating it with concepts such as “Jew-baiting”, “Nazism”, “suffering under tyranny” and “Germany in 1933-1945”. While many of these visitors did not change their opinion of the “White Rose” movement after the exhibition, some visitors, especially students, gained a more positive image of the movement after taking part in the exhibition. These results suggest that the exhibition was effective in achieving its original target of forcing students to look at their own ways of life after taking part in the exhibition.

**Key Words** : White Rose, World War II, university students, Germany, Japan

1. はじめに

本報告は、2004-2007年度人間総合研究センタープロジェクトの一環として実施された、巡回パネル展示『白バラ—ヒトラーに抵抗した学生たち—』(以下、

〈「白バラ」展示〉)会場において行ったアンケートの結果集計であり、2004-2007年度人間総合研究センタープロジェクト「危機と人間」(以下、〈「危機と人間」プロジェクト〉)の報告である。

---

<sup>a</sup> 早稲田大学 人間総合研究センター (Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University)

<sup>b</sup> 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

### 1.1 「危機と人間」プロジェクトから「白バラ」展示へ

上記プロジェクトは、従来の人間総合研究セン

タープロジェクトの一つとして2004年から研究活動を開始した。その枠組みは以下の通りである。

表1 研究活動の枠組み

研究課題	危機と人間
研究代表者	村上公子
プロジェクト参加研究員	嵯峨座 晴夫(2004年度のみ), 嶋崎 尚子, 谷川 章雄, 根ヶ山 光一, 加藤 茂生(2004年度後期から), 村上 公子
研究目的	人間はその一生において、好むと好まざるとにかかわらず、様々な危機に直面し、それに対応していかざるを得ない。場合によっては、ある社会を襲う危機によって、その社会に生きる人間の生が定められることもある。そのような人間と危機との関わりを、様々な研究分野からの視点で捉え、立体的なものとして、定義し直すことを目指す。

この枠組みのもと、上記の研究目的を達する準備として、2004年度においては、まず、各研究員がこれまで自らの研究分野で獲得してきた「危機」概念を共有すべく、各々具体的な事例に沿った「危機と人間」に関わる考察を発表した。

その結果、各研究分野により「危機」の概念規定が非常に異なることが明らかになった。この相違を集計、考察してプロジェクトとして統一的な「危機」概念を構築し、それに基づく具体的な研究成果を上げるためには、残念ながら2年間という期間は短期に過ぎると認識せざるを得なくなったのである。

しかし、せっかくのプロジェクトを社会的に何らかの意味ある成果を残すものとしたい、という研究員の総意もあり、当初の目的とはいささか異なるものではあるが、プロジェクト研究代表者村上の研究分野である、ナチ・ドイツ時代の抵抗運動というフィールドにおいて、「危機」に対する「人間」の対応例として際だった存在の一つ、「白バラ」グループの事跡を紹介、解説する展示パネルを作成、日本各地の大学で巡回展示を行うこととした。

これは、2005年度が「日本におけるドイツ」年であったことにも触発されたものである。「白バラ」展示は公式のドイツ年関連文化事業として認可を受け、ドイツ大使館、ドイツ文化センター、日本独文学会、ドイツ現代史研究会の協力を得て、2005年5月以降、大学を中心に日本各地で開催され、一定の観衆を得、一応の評価を受けた。また、2006年1月には「白バラ」メンバーの一人を主人公とするドイツ映画『白バラの祈り』が東京で封切られた。この映画の公開に合わせる形で、東京ドイツ文化センターの協力を

よる「白バラ」旧メンバーの来日をも得て、2006年2月には同センターにおいて国際シンポジウムが開催され、「白バラ」展示も映画配給会社キネティックとの共催で、枠を拡大して実施された。

### 1.2 「白バラ」展示

「白バラ」展示パネルは、写真および解説計47枚に及ぶA1版のパネルである。「白バラ」は、1942-1943年にミュンヘンを中心に活動した、大学生を主体とする抵抗グループであるが、1980年代後半、グループの関係者・遺族の一部が「白バラ」の遺志継承を目的として、ミュンヘンで白バラ財団を設立した。白バラ財団は、ミュンヘン大学構内の白バラ記念室に、「白バラ」の活動理解のためのパネル展示を常設している。「危機と人間」プロジェクトで作成したのは、白バラ財団が常設パネル展示の簡易・巡回版として作成したパネルのテキストの部分を日本語に翻訳し、日本の空間事情に合わせて、大きさも少し縮小したものである。

「危機と人間」プロジェクトの枠組み内でのパネル作成を決定すると同時に、日本独文学会、ドイツ現代史研究会に協力を要請し、各大学のドイツ語、ドイツ関連科目担当教員に巡回展示参加を呼びかけた。当初、パネル運送費用の問題解決が危ぶまれたが、国際基督教大学21世紀COEプログラム「平和・安全・共生」の全面的な協力と、財団法人倶進会の資金援助を得ることができ、その結果、東京以西の地域のみではあったが、最終的に2005年度にかけて16箇所で開催することができた。具体的な開催地、主催者、並びに開催期間は表2の通りである。

表2 「白バラ」展示の開催地、主催者、開催期間

開催地	主催者	開催期間
早稲田大学本部キャンパス 7号館会議室	早稲田大学人間総合研究センター「危機と人間」プロジェクト	2005年5月14日～28日
共立女子大学一ツ橋キャンパス	共立女子大学	2005年6月2日～16日
慶應大学日吉キャンパス 来往舎1階ギャラリー	慶應大学法学部	2005年6月20日～30日
鹿児島大学総合教育研究棟 2階ロビー	鹿児島大学教育学部	2005年7月4日～15日
山口市采香亭	山口日独協会	2005年9月25日～10月2日
九州大学中央図書館(箱崎キャンパス)	九州大学言語文化研究院	2005年10月8日～28日
長崎大学学生プラザ	長崎大学、長崎外国語大学、長崎日独協会	2005年11月1日～8日
関西大学 千里山キャンパス	関西大学人権問題研究室	2005年11月14日～28日
同志社大学京田辺キャンパス	同志社大学言語文化教育研究センター	2005年12月1日～10日
立命館大学経営学部	立命館大学経営学部	2005年12月12日～24日
京都ドイツ文化センター	早稲田大学人間総合研究センター「危機と人間」プロジェクト、京都ドイツ文化センター	2006年1月10日～21日
奈良女子大学文学部	奈良女子大学文学部	2006年1月24日～3日
有楽町朝日ギャラリー	早稲田大学人間総合研究センター「危機と人間」プロジェクト、キネティック、朝日新聞社	2006年2月3日～8日
東京ドイツ文化センター	早稲田大学人間総合研究センター「危機と人間」プロジェクト、東京ドイツ文化センター	2006年4月3日～7日
三鷹市役所	国際基督教大学21世紀COEプログラム「平和・安全・共生」、三鷹市、早稲田大学人間総合研究センター「危機と人間」プロジェクト	2006年5月8日～13日
国際基督教大学 湯浅記念館	国際基督教大学21世紀COEプログラム「平和・安全・共生」、早稲田大学人間総合研究センター「危機と人間」プロジェクト	2006年5月16日～27日

## 2. 「白バラ」展示アンケート結果の概要

以下は、2005年5月から2006年5月にわたって実施された「白バラ」パネル巡回展示会場において行ったアンケート調査（表2の会場のうち9、同志社大学と12、奈良女子大学を除く会場で実施）の結果をもとに作成した。

調査は自由回答形式とし、有効回答総数は1719票であった。以下では、主な調査結果である「来場者の属性」および「白バラ展への参加動機」、「白バラ展参加後の意識変化」についてみていくこととする。また、クロス集計に用いた主な変数は「身分」としたが、項目ごとに適宜変数を追加した。

なお、本調査は、今回の展示がどのような層の人たちにアピールして会場に足を運ぶことを促したのか、そして、展示を見た来場者が今回の展示に対し

てどのような反応を示すのか、ということについて概観し、今後の示唆を得ることを目的としている。そのため、質問内容等は来場者が答えやすいように配慮した結果、複数の形式のアンケートを作成した。したがって、アンケート用紙は会場ごとに多少異なる部分があり、統計学的には不備が多いものとなっているが、できる限り回答の調整を行い、一定の妥当な結果が求められるよう工夫し集計を行った。

### 2.1 来場者の基本属性

来場者に対して、設問1で「性別／年代／身分」をそれぞれ単一選択式で尋ねた。なお既述の通り、選択肢については会場によりばらつきがあったため、性別と年代に関しては項目がない場合は非該当扱いとした。身分については、[学生、大学生、大学生以

表3 身分 (%)

	回答者数(N)	学生	学生以外	無回答
総数	1719	53	45.5	1.5

(注1: 身分不詳25名)

外の学生]の項目を「学生」に、[学生ではない、教員、その他]という項目を「学生ではない」に集約して結果をまとめた。

集計の結果、参加者の性別は、男性111名、女性138名、無回答2名(その他、性別不詳は1468名)であった。回答が得られた者のみではあるが、男女に大きな差がみられなかったことから、性別にかかわらず多くの方に参加いただけたことがあきらかとなった。また、得られた参加者の年代の分布は、学生を中心とする世代である10代が70名、20代が94名、教員や社会人が多くを占めるであろう30代が22名、40代が18名、50代が44名、第二次世界大戦と同時期にすでに出生していた者を多く含む60代が30名、70代以上が31名、無回答4名(その他、年代不詳は1406名)という結果となった。データの欠損が多いため年代に関する参加者の傾向を知るのとは不可能であるが、回答を見る限り、10~20代を合算すると164名、30代以上を合算すると145人となり、老若に関わらず多くの方々に参加いただけたといえるだろう。なお、性別および年代に関してデータが少なかったために、属性の詳細な傾向を知ることが出来なかったことは、今回のアンケート調査の大きな反省点である。

参加者の身分について、学生が約半数の53.0%を「学生」が占める結果となった(表3)。先ほどの年代の分布も同様と思われるが、学生の多さは、開催会場の多くが大学であったという会場設定のためであると考えられる。なお、「学生」の内訳として、集約前の回答について詳細を調べたところ、大半は大

学生であったが、中には大学院生、高校生、ドイツ語学校の生徒なども含まれていた。また、「学生ではない」の多くは、教員や社会人、あるいは開催地の地域住民を含んでいた。特に地域住民は、最寄りの公民館などで展示が行なわれていたことで足を運んだものと考えられる。

## 2.2 参加動機

次に、「なぜ白バラ展に参加したか」について、参加者にたずねた。選択肢は、会場によりばらつきがあったため、項目を集約して結果をまとめた。

その結果、最も多かった参加動機が「チラシやポスターを見て」で46.7%、次いで「人に勧められて」が30.5%、「なんとなく」が12.4%、「その他」が8.2%であった。この結果から、半数程度の者が、大学あるいは地域の各機関から情報を得て、白バラ展に参加したことがわかる。

参加動機の内訳を属性別に見ると、「学生」の参加動機で最も多かったのは、「人に勧められて(講義で教員に勧められた者も含む)」で42.2%、次いで「チラシ・ポスター」が37.5%、「なんとなく」が16.8%という結果が得られた。他方、「学生以外」の参加動機として最も多かったのは「チラシ・ポスター」で58.1%、その他に多かった新聞などを含めると、およそ6割以上の者が何らかの情報媒体から情報を得て、自主的かつ積極的に展示会に参加していたようである。

表4 参加動機 (%)

	回答者数(N)	チラシ/ ポスターを見て	人に 勧められて	なんとなく	その他	無回答
身分 学生	911	37.5	42.2	16.8	2.4	1.1
学生以外	783	58.1	17.4	7.2	14.8	2.6
総数	1719	46.7	30.5	12.4	8.2	2.1

(注1: 身分不詳25名)

## 2.3 白バラの認知度

さらに、「この展示前に、「白バラ」の活動について知っていたか」どうかについてたずねた。その結果、参加者の多く（57.9%）は、いわゆる「白バラ」の活動を「知らなかった」と回答していた。

属性別に見ると、白バラの活動を「知っていた」と答えた者は、学生で26.5%、学生以外の者で58.7%であり、学生と学生以外の者の白バラ活動に関する知識には約30ptという大きな差が見られた。

このような知識の差が見られた主な理由としては、身分を学生以外と答えた者の中に、知識層である教員が含まれていたことがあげられるだろう。加えて、地域住民などに“知っていたからこそ興味を持って積極的に展示を見に来た”という者が多く含まれていたことも関係していると考えられる。毎日新聞の世論調査（2005/8/15朝刊）<sup>1)</sup>によれば、日本が米国や中国などと戦った戦争についてどの程度知っているかという設問を年代別に見ると、「十分に知っている」という回答は20代で6%、30代で7%に過ぎず、60代の23%、70代以上の55%と大きな違いがみられる。また「あまり知らない」は20代で31%、30代で30%に達したことが示されていたことから、世代によって歴史認識の違いがあることが推測される。

しかし、白バラ運動について知らない若い世代に展示を通じて当時のドイツを知ってもらいたいという本展示の目的を勘案すると、白バラ運動に対して知識がなかった学生が本展示に多く参加していたというこの結果は、一定の有意義な成果であったといえよう。

次に、参加動機別に白バラの認知度をみてみたい。集計の結果、展示前の白バラへの認知度が「チラシやポスターを見て」参加した者は、「人に勧められて」

あるいは「なんとなく」参加した者のおよそ2倍であった。この結果からは、そもそも展示前から白バラの活動（あるいはその時代の事柄）に興味を持っていた人たちが、ポスターやチラシなどの情報を後押しとして自主的に展示会に赴き、参加動機がもともと高かった層であった一方で、人に勧められたり、なんとなく展示会に赴いた者の多くは、本展示に受動的に参加したということがみてとれるだろう。

## 2.4 白バラ展後のイメージの変化

### ①白バラ展参加前のイメージ

続いて、参加者に白バラ展に参加する前の「1933年から1945年のドイツ」のイメージについて自由記述でたずねた。加えて、白バラ展参加後のイメージの変化の有無とイメージが変わった場合のイメージの変化内容を自由記述でたずねた。

自由記述回答の分析にあたっては、テキスト型データ解析ソフト「Word Miner® Version1.01e」（日本電子計算（株））を用いて、構成要素の抽出および多次元解析を行った。構成要素の抽出は、分かち書き処理後、同種の語を一つの語に置換し、不要な語を削除するための置換辞書と削除辞書を作成するなど、「1933年から1945年のドイツ」のイメージに関する用語をもれなく網羅するよう適宜修正を加えた。その結果、分かち書き後に抽出された構成要素数は1824、句読点・助詞・特殊記号を除去後の要素数は491であった。なお、本報告では、得られた構成要素のうち出現頻度の少ないものは一般性が低いと判断し、頻度10以上（閾値=10以上）の構成要素52語を採用することとした（表6）。

さらに、得られた全構成要素を対象に対応分析を行い、対応分析から得られた成分スコアをもとにク

表5 白バラの認知度（%）

		回答者数	知っていた	知らなかった	無回答
身分	学生	911	26.5	73.2	0.3
	学生以外	783	58.7	40.6	0.6
参加動機	チラシ/ポスターを見て	263	51.6	48.3	0.1
	人に勧められて	180	25.7	73.5	0.8
	なんとなく	69	24.3	75.7	0
	その他	36	64.5	34	1.4
総数		1719	41.4	57.9	0.7

（注1：身分不詳3名、参加動機不詳19名）

表6 展示前イメージの構成要素 (サンプル数別)

構成要素	度数	構成要素	度数	構成要素	度数
1 ヒトラー	455	19 ホロコースト	44	36 圧政	15
2 ナチス	419	20 全体主義	44	37 言論	14
3 独裁	248	21 ファシズム	42	38 残酷	14
4 ユダヤ人	111	22 迫害	37	39 洗脳	14
5 イメージ	108	23 支配	36	40 不自由	14
6 時代	102	24 アンネ・フランク	28	41 差別	13
7 ドイツ	88	25 恐怖	24	42 残虐	13
8 国家	75	26 暗黒	22	43 歴史	13
9 ユダヤ人迫害	73	27 弾圧	22	44 ゲットー	12
10 ユダヤ人虐殺	72	28 ゲシュタポ	21	45 第二次世界大戦	12
11 自由	62	29 人間	21	46 ドイツ国民	11
12 戦争	61	30 白バラ	21	47 ナチス政権	11
13 虐殺	58	31 国民	20	48 第三帝国	11
14 日本	56	32 世界	17	49 反対	11
15 アウシュビッツ	48	33 強制収容所	16	50 暴力	11
16 抑圧	47	34 社会	16	51 思想	10
17 抵抗運動	46	35 ヒトラー政権	15	52 死	10
18 狂気					

表7 展示前イメージのクラスターごとの構成要素

クラスター	クラスター1 ナチスによる国民支配	クラスター2 ユダヤ人迫害	クラスター3 虐殺行為	クラスター4 圧政政治	クラスター5 ファシズム	クラスター6 暗黒時代	クラスター7 弾圧と抵抗
クラスターサイズ	16	12	5	3	3	2	11
	アウシュビッツ	アンネ・フランク	ユダヤ人迫害	ナチス政権	ドイツ	暗黒	ゲシュタポ
	ドイツ国民	イメージ	虐殺	圧政	ファシズム	第三帝国	狂気
	ナチス	ゲットー	差別	反対(する者)	全体主義		国家
	ヒトラー政権	ヒトラー	残虐				死
	ホロコースト	ユダヤ人	残酷				時代
	強制収容所	ユダヤ人虐殺					人間
	恐怖	言論					弾圧
	国民	洗脳					抵抗運動
	思想	第二次世界大戦					日本
	支配	独裁					白バラ
	自由(ではない)	迫害					歴史
	社会	暴力					
	世界						
	戦争						
	不自由						
	抑圧						

ラスタ分析を行った。その結果、7つのクラスタ解が得られた（表7）。クラスタは、含まれる構成要素の関連から、それぞれ＜ナチスによる国民支配＞、＜ユダヤ人迫害＞、＜虐殺行為＞、＜圧政政治＞、＜ファシズム＞、＜暗黒時代＞、＜弾圧と抵抗＞と名づけた。

クラスタ分析の結果からは、「1933年から1945年のドイツ」のイメージとして、ヒトラーを中心としたナチスドイツ政権による抑圧・弾圧やユダヤ人虐殺など、いわゆる“マイナスのイメージ”が多く語られていることが明らかとなったといえよう。またその他には、「ゲシュタポ」や「アンネ・フランク」、「強制収容所」といった、教科書で学ぶ歴史単語のようなイメージが多く連想されていた。こうした教科書的単語の多さは、参加者の多くが歴史的知識として学んだものを、そのまま「1933年から1945年のドイツ」に当てはめ、ステレオタイプ化したイメージで当時のドイツをとらえていることから生じるものであると考えられる。

## ②白バラ展参加後のイメージ変化の有無

次に、白バラ展参加後のイメージの変化について「白バラ展に参加したことで変化があったかどうか」を「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の3択で尋ねた。その結果、白バラ展に参加したことによって「1933年から1945年のドイツ」のイメージが変わったと答えた者は、32.6%にとどまった。

イメージが変わらなかったと答えた者（59.1%）の多くは、後の自由記述で、参加前に「ナチスドイ

ツによる独裁（性別不詳、年代不詳、学生）」、「暗黒の時代（女性、60代、学生でない）」、「ユダヤ人の迫害（男性、20代、学生）」などの1933年から1945年のドイツにマイナスのイメージを持っており、白バラ展に参加した後もこうしたイメージに“変化はない”と答えていた。一方、イメージが変わったと答えた者の自由記述の中には、「市民的勇氣（性別不詳、年代不詳、学生）」、「一筋の光（性別不詳、年代不詳、学生）」、「良心（性別不詳、年代不詳、学生でない）」、「ドイツ＝ナチスでないということ（性別不詳、年代不詳、学生）」など、ナチス一辺倒に見えるドイツあるいはドイツ国民に対して、プラスのイメージ変化があったことが記述されていた。

続いて、イメージ変化と属性との関連について調べた。まず、身分別に見ると、白バラ展後のイメージに大きな変化は見られないと答えた者が、学生も学生でない者も半数以上を占めるという結果となった。ただし、「学生」は「学生以外」に比べてイメージ変化があったと答えた者が10pt程度多かった。このことから、学生はそれ以外のものに比べて多少なりとも展示参加後のイメージ変化がみられたといえるだろう。

さらに、参加動機別にイメージ変化を集計した結果、どの動機を見ても約6割の者がイメージの変化はないと答えていた。したがって、参加動機ごとの大きな変化は見られず、自主的な参加であろうがなかろうが、そのことがイメージの変化には大きく影響しなかったといえる。

最後に、白バラ展参加以前の白バラ活動への認知

表8 白バラ展後のイメージ変化（%）

		回答者数	変わった	変わらなかった	無回答
身分	学生	235	36	57.6	6.4
	学生以外	158	28.6	61.3	10.1
参加動機	チラシ/ポスターを見て	263	32.8	58	9.2
	人に勧められて	180	34.3	60	5.7
	なんとなく	69	32.2	61.2	6.5
	その他	36	25.5	63.8	10.6
白バラの認知度	知っていた	189	26.6	64.7	8.7
	知らなかった	372	37.3	55.2	7.4
総数		1719	32.6	59.1	8.3

（注1：身分不詳3名、参加動機不詳19名、認知不詳12名）

度別に集計を行った。その結果、＜既に白バラの活動について知っていた者＞の白バラ展後のイメージ変化は、「変わった」者が26.6%、「変わらなかった」者が64.7%という結果であった。反対に、＜白バラの活動を知らなかった者＞の白バラ展後のイメージ変化は「変わった」者が37.3%、「変わらなかった」者が55.2%であった。

この結果は、展示会以前に白バラを知らなかった者は、以前に知っていた者に比べてよりイメージの変化があったことを示しており、本展示会がこれまで白バラの活動を知らなかった者に対して、「1933年から1945年のドイツ」のイメージを多少なりとも変化させる契機となったことが示唆されたといえるだろう。

なお、白バラの活動を知らなかった者(372名)の白バラ展後のイメージ変化に関する自由記述回答からは、「力強く自分の命をかけて抵抗していた人たちがたくさんいたことに驚き、犠牲になった人々についても考えさせられた。(男性、10代、学生)」、「かわりはしないがあの時代に強力なナチに対抗した若者たちがいるというのに大きく勇気付けられた(性別不詳、40代、学生でない)」など、プラスのイメージ変化を述べる記述が多く見られた。

### ③白バラ展参加後のイメージ

本アンケート調査では、前述の①と同様、イメージの変化があったと答えた者に具体的な変化イメージについて自由記述回答を求めている。

Word Miner<sup>®</sup>を用いて自由記述回答の集計を行った結果、分かち書き後に抽出された構成要素数は1125、句読点・助詞・特殊記号を除去後の要素数は332であった。なお、すでに述べたように、頻度10以上(閾値=10以上)の構成要素29語を採用することとした(表9)。

さらに、得られた全構成要素を対象に対応集計を行い、対応集計から得られた成分スコアをもとにクラスタ集計を行った。その結果、6つのクラスタ解が得られた(表10)。クラスタは含まれる構成要素の関連から、それぞれ＜ユダヤ人迫害と白バラ＞、＜学生による抵抗運動＞、＜抵抗運動への共感＞、＜体制批判＞、＜当時のドイツ＞、＜良心＞と名づけた。

白バラ展参加前と展示後のクラスタの構造を比較すると、展示前の＜ナチスによる国民支配＞、＜ユダヤ人迫害＞と、展示後の＜ユダヤ人迫害と白バラ＞にみられるような「ヒトラー」や「独裁」、「ユダヤ人」といった当時のドイツ国家の象徴となる事象の取り上げ方に大きな変化は見られなかった。しかし、展示前には＜虐殺行為＞、＜圧政政治＞、＜ファシズム＞、＜暗黒時代＞といったナチスやヒトラーに関連するマイナスのイメージを含むクラスタが多く抽出されたのに対して、展示後には＜学生による抵抗運動＞、＜体制批判＞など、展示参加以前とは別に新たなイメージが構成されていることがうかがえた。また、＜抵抗運動への共感＞、＜良心＞といったクラスタからは、ナチスやヒトラーに抗う若者の

表9 展示後イメージの構成要素 (サンプル数別)

構成要素	度数	構成要素	度数	構成要素	度数
1 ドイツ	128	11 時代	32	21 感動	18
2 抵抗運動	120	12 反対	30	22 事実	16
3 ナチス	76	13 勇気	29	23 独裁	16
4 ヒトラー	57	14 国家	28	24 希望	14
5 イメージ	52	15 自由	26	25 ユダヤ人	13
6 活動	50	16 良心	26	26 ドイツ国内	12
7 若者	44	17 日本	25	27 心	12
8 白バラ	44	18 行動	23	28 歴史	12
9 学生	43	19 命	23	29 力	10
10 自分	33	20 人間	20		



表10 展示後イメージのクラスターごとの構成要素

クラスター	クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6
	ユダヤ人迫害と白バラ	学生による抵抗運動	抵抗運動への共感	体制批判	当時のドイツ	良心
クラスターサイズ	16	12	5	3	3	2
	イメージ ヒトラー ユダヤ人 事実 自分 独裁 白バラ	ドイツ国内 学生 感動 抵抗運動	ナチス 希望 行動 若者 人間 命 勇気 力 歴史	国家 自由(を求める) 反対(する者)	ドイツ 活動 時代	心 日本 良心

姿や、その姿をみて勇気や希望を感じるといった、肯定的な意識の変化を表すものが多く出現していた。

このことから、どちらかというマイナスのステレオタイプだった「1933年から1945年のドイツ」のイメージが、白バラ展参加をきっかけに、プラスのイメージも生じたことが示唆されたといえよう。

今回の白バラ展の目的の1つに、「ナチ時代のドイツと現代の日本という、全く異なる状況に置かれた大学生の生き方を参加者が認識し、自らの生を振り返る参加動機としてほしい」がある。今回の結果から得られたイメージの変化に関する自由記述、特にイメージ変化として「学生による抵抗運動」、抵抗運動への共感に見られるクラスターが新出したことは、白バラ展に参加した方々にとって多少なりとも生き方を内省する状況を作ることが出来たといえるのではないだろうか。

## 2.5 白バラ活動への参加意思の有無

最後に、参加者に「もしあなたが1933年から1945年のドイツにいて、友人として「白バラ」の活動を知っていたら、どうしますか」という問いに対する答えを、「黙っている」、「やめろという」、「一緒に手伝う」の中から1つを選ぶ単一選択方式でたずねた。その結果、「黙っている」と答えた者が最も多く42.4%、次いで「一緒に手伝う」とした者が31.5%、「やめろという」者が9.0%、未回答が17.1%という結果になった。

この質問には他の質問と異なり未回答が非常に多く、また複数を選択してしまう多重回答も多く見られた。さらに、その後の自由記述欄にも、多くの者が「その状況にならなければわからない…」という注意書きをつけて回答している場合が多く見られた。本質問項目は、自らの命あるいは親族の命の危機という極限の状況に陥ったとき、「正義(とされるもの)

表11 白バラ活動に参加するか否か (%)

		回答者数	やめろという	黙っている	一緒に手伝う	無回答
身分	学生	235	12.2	51.2	25.6	11.1
	学生以外	158	27.7	35.3	56	61.2
参加動機	チラシ/ポスターを見て	263	7.8	38.4	34.5	19.3
	人に勧められて	180	11.6	51.6	26.5	10.3
	なんとなく	69	9.3	46.7	28	15.9
	その他	36	5	28.4	39	27.7
総数		1719	9	42.4	31.5	17.1

(注1: 身分不詳3名、参加動機不詳19名)

のために自分の良心にもとづいて行動を起こせるか”という、ある意味究極の選択を回答者に求めている質問ともいえるだろう。そのため、未回答や多重回答の多さといった回答の揺らぎが生じたものと考えられる。

なお、身分別に回答の分布を見ると、学生の51.2%は「黙っている」と答え、学生以外の「黙っている」の32.8%に比べて、20pt近い差があった。一方、「一緒に手伝う」と答えた者は学生で25.6%、学生以外で56.0%とこちらも大きな差が生じていることが見て取れた。

この結果からは、一見学生たちが、抵抗運動に対して参加も制止もせずになるべく関わりたくない、距離をおきたいと思っている姿が感じられる。しかし、「黙っている」と回答した者の中には、「自分の家族や身近な人に危険がおよぶから」、「生きていることに意味がある」、「一緒に手伝う」と答えたいが、家族に反対されたら「黙っている」になると思う」と注意書きをつけた者も多かった。つまり、学生にみられた「黙っている」という回答の多さには、自分に被害がおよぶといった考えや参加の回避ではなく、むしろ自分なりに大切なものを守るための消極的な応援かつ現実的な選択といった側面があったのではないかと考えられる。

NHKの意識調査(2004)<sup>2)</sup>によると、1973年以降、日本人の生活目標は、「利志向(しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く)」、「正志向(みんなと力を合わせて、世の中をよくする)」が減少し、「快志向(その日その日を、自由に楽しく過ごす)」や「愛志向(身近な人たちと、なごやかな毎を送る)」が増加してきたと指摘される。こうした意識の変化は、日本人の社会に対する関心の中心が社会全体から自分の周辺に移りつつあること、また生活において重視する比重が将来よりも現在中心になりつつあることを意味しているといえよう。調査の母体や年齢が異なるため一概には比較できないが、本アンケートの結果見られた、学生の大切なものを守るための消極的な応援かつ現実的な選択といった回答からは、こうした日本人の生き方に対する意識の変化が背景にあるといえるかもしれない。

### 3. まとめ

この「白バラ」展示を企画した際のねらいとしては、大学でドイツ語ないしドイツ関連の授業を担当する教員の授業において、学生にナチ・ドイツ時代の歴史背景等の予備学習を行わせ、教員とともに学生が展示パネルを見て、その後再び教室での討論を行い、それによってナチ時代のドイツと現代の日本という、全く異なる状況に置かれた大学生の生き方を学生が明確に認識し、自らの生を振り返るきっかけとしてほしい、と考えていた。とはいえ、例えば語学担当教員の場合、大学での語学教育の枠組み内で、限られた時間的条件下のもと、上記のような教科書を逸脱する内容の教育を行うことは、ほとんど不可能である。展示主催者として実際に各地の教員に要請できることは、展示が行われることの告知程度に止まらざるを得ず、それ以上の参加行動は、まさに「ねらい」以外ではあり得なかった。

このような反省材料はあるものの、結果として「白バラ」展示には、老若に関わらず多くの方々に参加いただくことができ、また、「白バラ」を知らない学生が多く含まれていたことが明らかとなった。さらに、展示会以前に白バラを知らなかった者にイメージの変化が多く見られたこと、なかでも特に、学生でない者に比べて学生のほうが展示参加後のイメージ変化があったことが示唆されたという結果は、本展示の企画時のわれわれの願望が少なからず実ったものと考えることができよう。この展示会が、普段の語学教育の枠組みを越えて、「1933年から1945年のドイツ」に対する学生のイメージを多少なりとも変化させる契機となったことが示唆された意義は、大きいと考える。

なお、資金も人的、組織的資源も乏しい中での巡回展示という条件ではやむを得ないところがあったとはいえ、会場によって主催責任者が異なり、状況のコントロールは現場責任者に委ねざるを得なかったことから、アンケートに不統一、不明確な点が多々できてしまったことは、調査の価値を損なうことになってしまった。この点については、今後の課題としていきたい。

## 引用文献

- 1) 毎日新聞(日刊 全国版)、「毎日新聞世論調査：日本の戦争 間違っていた／やむを得ない―世代差、浮き彫り」、2005.8.15.
- 2) NHK放送文化研究所編、『現代日本人の意識構造』、日本放送出版協会、2004.

## 注

- <sup>1</sup> 集約の詳細は次の通り。  
[チラシ／ポスターを見て] ⇒「チラシ／ポスターを見て」、[人に勧められて] ⇒「人に勧められて」、[なんとなく]の項目は「なんとなく」、[複数回答／欄外回答／ウェブを見て] ⇒「その他」。
- <sup>2</sup> Word Miner<sup>®</sup>は、文部科学省の社会統計や消費者センターの分析などに活用され、優れた多次元データ解析手法に基づいたデータ・サイエンスと

自然言語処理を統合した有用性が十分に実証されているツールである。また、従来研究者の経験と裁量に大きく依存していたテキスト分析の妥当性・信頼性の欠如という問題を十分にクリアにできるものと考え、本アンケートの分析に使用することとした。

- <sup>3</sup> 得られた7つのクラスタは、参加者が白バラ展前に持っていた1933-1945年のドイツのイメージを類型化したものである。本調査では、分解したイメージの個別性を問うのではなく、参加者の持つイメージの共通性を見出すことで、白バラ展参加が1933-1945年のドイツのイメージに与える変化を考察したいと考えた。そのため、Word Miner<sup>®</sup>によるクラスタ分析という手法を用いることとした。